

社会とともに 地域とともに

レポート1

「鉄で世界をつくってみよう！」

鉄の彫刻家・青木野枝さんと子供たちのワークショップ



昨年3月まで2年間にわたり、鉄の彫刻作品で『ニッポン・スチール・マンスリー』の表紙を飾った彫刻家の青木野枝さん。青木さんが子供たちに鉄の彫刻づくりを指導する4日間のワークショップ「ハローホリデー 鉄で世界をつくってみよう」が新潟県中里村で行われました。これは7月20日から50日間にわたって越後妻有で開催された「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2003」の一環として行われたもの。青木さんにとっては昨年、青森で行なった「キッズ・アートワールド あおもり2002こどもの時間」などに続く、子供たちとのワークショップです。



ワークショップが行われた中里村の旧高道山小学校跡は、クローバーの緑の絨毯に覆われ、その中にアオガエルやバッタやヘビまでもが顔を出すのどかな眺めが広がっています。7月5日（制作プラン、スケッチ、溶断・溶接と



いう鉄の加工の仕方を見る）から、6日（材料探し、鉄材への下書き、溶断・溶接開始）19日（溶断・溶接続き）、20日（作品完成、名札付け、賞状・青木さん特製の記念メダル授与式、記念撮影、バーベキューパーティー）の4日間。取材した19日は地域の小学生18人が参加していました。青木さんとその仲間であるアーティストをはじめ、高道山地区ボランティア、ハローホリデー運営スタッフらの指導の下、開始されました。

「鉄って面白いね。
鉄って柔らかいね！」
素朴でいて鋭く新鮮な
子供たちの言葉

子供たちの作品のテーマは「空間、おうち、部屋」。さらに深いその意味は「一人でいたい場所」「一人でいるのは、豊かな時間でもあると伝えたい」と青

木さんは語ります。使われるのは厚さ12ミリの新日鉄製の耐候性鋼「コルテン鋼」。サビない「コルテン鋼」で作られた子供たちの作品は、青木さん作のクリスマスツリーのような円錐形の作品に取り付けられ、高道山小学校跡に常設展示されています。

前回、このコルテン鋼に下書きをした線に沿って、子供たちはまず鉄を溶断。大人たちに手伝ってもらいながらも、子供たちは怖がることもなく、溶接マスクをつけ、真剣な表情で鉄と向かい合っています。溶断された鉄はすぐ冷やされ、次は溶接へ。もちろん鉄を加工するのは初めてという子ばかり。「どうだった？」と尋ねてみると、目を輝かせながら、口々に「鉄って面白い！」と答えてくれました。また何人かの子供たちの口から飛び出したのは「鉄って柔らかいね」という言葉。普段は固く冷たいイメージの鉄が、熱すれば自分たちの手でたやすく曲がり、切



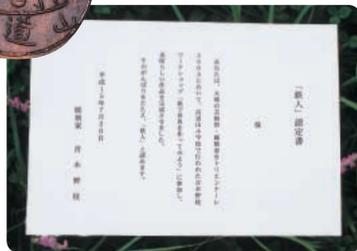
断できることが新鮮な驚きだったよう。鉄というものの持つ新しい可能性や未来をも言い得たような、子供たちの率直で素朴な感想が印象的でした。

子供たちがつくっている「空間、おうち、部屋」は、実に想像性豊かで個性さまざま。クローバーやたけのこ、きのこ、バッタなど、自然をモチーフにした作品が多いのは、やはり豊かな大自然の中で育まれている中里村の子供たちならではのでしょう。りんごの木とサイをつくっていた山田優希くんは、「鉄を切るのが一番面白かった。サイは妹の洋服についていたから思いついたの」。付き添いのお母さんは近所の鉄工所にお勤めですが、「ふだんはあまり工場の中には入らないので、溶断・溶接を間近で見るのは珍しかったですね。優希もとても楽しかったようで、よかった」

**大人たちはおなかが空いても
子供たちは元気いっぱい。
溶接作業に全力投球！**

大きな木を背景にバッタに乗った自分をつくっていたのは廣田未来ちゃん。「鉄ってもっと薄いかと思った」と言います。その横で「この鉄は12ミリですね？」と未来ちゃんのお父さん。シリンダーをつくる隣町津南町の会社にお勤めで鋼材加工はお手の物。溶接中も未来ちゃんに付ききりで、しっかりと指導されていました。溶接を手伝う大人たちも全員が真剣そのもの。作品の作り手である子供たちに、パーツを取り付ける位置などをひとつひとつ丁寧に確認しながら作業を進めていきます。その様子を見ていたスタッフの一人、中里村企画観光課課長・樋口秀一さんは「この付近では鉄に関しては本職の方が多いので助かります。青木さんも喜んでくださっています。大人たちがおなかが空いても、子供たちは熱心で帰ろうとしなくてね」と笑います。

やがて、すべての溶断・溶接作業が終わり、色を塗られた楽しい作品がずらりと並びました。クローバーの家、たけのこの家、プリンの家、鯛の家、星の家、お城のような家……。青木さんも「素晴らしい！びっくりしています。テレビアン！」と絶賛。楽しそうに家路に着く子供たちを見送りながら、



青木さんにお話をうかがいました。

「最初は火花が飛ぶとビクビクしていた子も、そのうちとも簡単にどんどん面白いものをつくっていく。『鉄って簡単だ。自分に近い鉄という物質は自分の手で切れて、くっつけられるんだ』と思ってもらえたら嬉しいですね。

作品の出来よりも、溶断・溶接してつくる時間そのものを楽しんでほしいと思います。子供たちの頭の中で想像が豊かにふくらんでいくのを感じるのは本当に面白いですよ。また大きい子が小さい子をフォローし、お父さん、お母さんやスタッフの方が地域の子供たちを大事にしている姿も嬉しいものでした」青木さん自身にとっても、とても楽しく充実した夏の4日間だったようです。



「雲谷（熊と鯨）」(2003年、部分、photo by 山本糾)

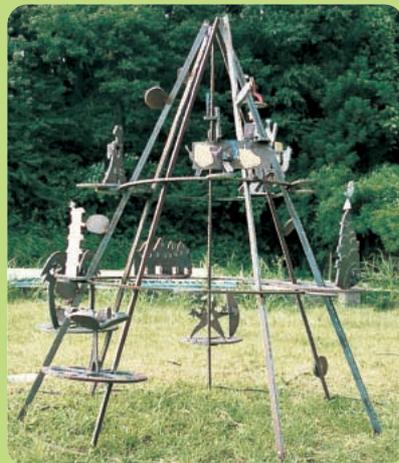
プロフィール あおきのえ

東京都生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科（彫刻コース）修了。80年代初めから、一貫して鉄を素材とし、溶断・溶接することで、新鮮で軽やかな作品をつくりつづけている。仕事場は自然豊かな埼玉県飯能市。2000年4月から当社営業広報誌『ニッポン・スチール・マンズリー』の表紙を飾った。2000年には平成11年度（第50回）芸術選奨文部大臣新人賞受賞。



**大地の芸術祭
越後妻有アート
トリエンナーレ 2003**

新潟県越後妻有地域6市町村が新潟県とのパートナーシップの下に7年前に立ち上げた地域活性化事業「越後妻有アートネットワーク整備構想」の一貫として、2000年に第1回展を開催。第2回展となる今回は「人間は自然に内包される」を基本理念として、越後妻有の里山を舞台に世界23か国、約150組のアーティストが作品を展開。



社会とともに
地域とともに

レポート2



「鉄鋼業が日本を支えているという プライドを感じました」

7月29日～31日の3日間「教員民間企業研修」 / 君津製鉄所・技術開発本部



新日鉄広報センターでは、「教員民間企業研修」の受け入れを実施しています。これは、(財)経済広報センターが、「経済界と教育界のコミュニケーションを促進するため」に実施している活動の一環。次世代を支える子供たちの教育にたずさわる教員の皆さんに、モノづくりの大切さ、それを支える技術力、循環型社会構築に向けた取り組みについて理解して頂くことが狙いです。今年も3日間の研修プログラムを作成・実施し、教員の皆さんからは、新日鉄が環境保全に熱心に取り組むのはなぜか、スチール缶とアルミ缶はどう違うのか、高炉の中はどうなっているのかなど、率直な質問・意見が寄せられました。



教員民間企業研修プログラム

1日目

エコマテリアル・鉄

他素材と比較した鉄の優位性と可能性について
(講師/技術総括部マネジャー 高松 信彦)

プラスチックリサイクル

廃棄プラスチックをコークス炉で再商品化する、
世界初の優れた技術について
(講師/君津製鉄所資源リサイクル部グループリーダー 茨城 哲治)

2日目

環境経営

「環境経営」を経営の基本方針として位置付けている
当社の取り組みについて
(講師/環境部環境リレーションズグループリーダー 丸川 裕之)

スチール缶リサイクル

リサイクル率ナンバー1を誇るスチール缶の優位性について
(スチール缶リサイクル協会事務局長 小田 武)

サビとの戦い

サビと戦ってきた新日鉄の技術開発の歴史と、
世界トップレベルの表面処理技術について
(講師/表面処理研究部長 宮坂 明博)

高炉設備技術の進化

世界最大級の君津4高炉改修における
設備技術の進化について

開かれた企業を目指して

(講師/EPCプラントエンジニアリング部部长 阿南 邦義)
広報センターの取り組み (広報センター)

3日目

新日鉄の競争力の源泉 / 最先端の研究開発

技術開発本部総合技術センター (RE) の見学



教員の方々から 寄せられた感想

都立富士高校 須貝 徳成先生

「企業の長期的な展望による取り組みに感銘を受けた。目先の利潤追求が目的だと思っていたが、全く違っていた。100年先を見据えているのが企業だ。各講師の見識・レベルが非常に高く大変ためになり、刺激を受けた」

都立大島高校 高橋 斉先生

「企業が『社会的責任』『環境保全』を当たり前重視している姿勢に驚いた。鉄がそれほど地球上に豊富で便利であることを知らなかったの、鉄の『魅力』を再発見した。今後は、環境保全ビジネスなどにも大いに期待する」

大田区立大森第一中学校 平林千寿子先生

「新日鉄が、各主管部門のボトムアップによりさまざまな良い活動をしていることに感銘した。鉄という素材を通じて、リサイクル、企業価値、持続発展可能な世界とは何か、世の中の動きが分かった。優れた人材を育てることの大切さを再認識した」

羽村市立栄小学校 遠藤 裕孝先生

「高炉改修の技術や、サビとの戦いなどを通して、人間性、熱意、情熱が伝わってきた。『企業は人』だと思った。新日鉄がとても身近になり、今では『家族』のように感じる」

江東区立深川第八中学校 惣田 修一先生

「日本が鉄鋼業をつくってきたと同時に、新日鉄が日本をつくってきた、

力強さを感じた。新日鉄は、技術、環境などで最先端をリードしているグローバル企業だと感じた。日本を支えるという『プライド』を感じた。教員も、人を育てるというプライドをもっと持つべきだと実感した」

文京区立第一中学校 杉浦 芳則先生

「当初のイメージと全く違って力強さを感じた。新日鉄は、個人も優れているからこそ組織としても力強いと思った。鉄のブランドをもっとアピールすべきだ」

都立足立東高校 長船 良昭先生

「当初持っていた『斜陽産業』というイメージが全く払拭された。自分の改革になった。自動車に使われている鉄がそれほど進化をとげていたことに驚き、今後『鉄素材』をウォッチしていきたいと思った。新日鉄が、苦しい時期をどうやって乗り越えたのか知りたい」

目黒区立第四中学校 熊本 恵美先生

「専門性の高さが、新日鉄を支えていることを実感した。自分がやりたいことを、周りを説得し実現していくことの大切さを知った。時間も準備もかかるが、やりとげるためには大切で、そうした思いを社内で共有・共感していくことも大切にしていると感じた」

日野市立南平小学校 鈴木 唯史先生

「新日鉄のリサイクル、環境ビジネスは社会に貢献していることが分かった。教員の研修受入により、新日鉄ファンは確実に増えていくと思うので、こうした地道な取り組みはぜひ息の長いものとして継続して欲しい」

「開かれた企業」を目指して

教員の皆さんの企業活動への関心はとても高く、企業経営の良い点を学校教育に活かそうという意気込みが感じられました。「開かれた企業」を目指し、社会に向けた理解活動を継続的に展開して理解を深めていくことの重要性を認識した3日間でした。

研修より

